探訪 北の風景 ㊽

赤松街道

渡島管内七飯町

青木和弘

渡島管内七飯町の市街地を通る国道5号の旧道は「赤松街道」と呼ばれる。1876（明治9）年、明治天皇の「七重勧業課試験場」（七重官園）への行幸を記念し、開拓使が五稜郭周辺の赤松の幼木を札幌本道（後の国道5号）に本格的に移植したのが始まりとされる。区間は七飯町峠下から函館市桔梗間の14・3キロメートル、現在、1164本の赤松がある（2015年4月現在「赤松街道を愛する会」調べ）。

この赤松の起源は幕末までさかのぼる。1853年（嘉永6年）にペリーが来航し、翌年、日米和親条約が締結され、1855年3月から箱館と下田の2港が、薪や水、食料の供給などのため開港になった。まだ、通商条約は結ばれていないので、貿易港として箱館、横浜、長崎の3港が開港するのは4年後のことだ。幕府は、外国船が必要とする牛肉や野菜を供給する牛牧場を七重村に設置し、1857年に、後に箱館奉行になる医師の栗本鋤雲（じょうん）（通称・瀬兵衛（せへえ））が「御薬園」（後の七重官園）を開いている。

御薬園は、七重の浜風を防ぐために植林するマツやスギの苗木、薬草を育てるための農園で、そこに栗本が、故郷の佐渡から取り寄せたアカマツの種子を植えたのが、この赤松の起源になった。御薬園の経営を引き継いだ吉野鐵太郎が、毎年、佐渡から種を取り寄せ、そこで育った赤松の苗木を、日本初の本格的西洋式馬車道となる札幌本道（函館・森間約45・2キロメートル、工事1872～73年）が開通する前の旧道の両側に移植し、札幌本道の開削が始まると、旧道の幼木をそちらに移植していたという。開拓使は、行幸の前後に、沿道の赤松を大量に補植している。

明治天皇が視察した七重官園は北海道初の農業試験場だった。後に開拓使長官となる黒田清隆が米国の農務局長ホーレス・ケプロンを招いて北海道開拓の詳細な調査を行い、欧米式の先進農法の導入を決め、開拓史の「七重開墾場」（七重官園）を設置したのだ。西洋式の農機具を使い、数多くの農作物の栽培を試し、北海道に適した品種の選別や栽培の工夫を重ね、酪農製品の製造も行っていた。後には、農耕機具の売買など、多様な事業を展開している。

「こもまき」は七飯の冬の風物詩。毎年、住民らで組織する「赤松街道を愛する会」のメンバーや子どもたちが参加して、取り付けや取り外しが行われる。外した麦わらには、マツの葉を枯らすとされるマツカレハの幼虫などがよく見つかるという

当時の七重を旅行したイギリスの女性、イザベラ・バードは、七重官園には、水車場や家畜房、バターなどを製造する製練場といった洋風建造物も多く建てられ、さながら外国のような風景だと日誌に書いている。

ところが1882年（明治15年）、「開拓使十年計画」が終わると開拓使は廃止になり北海道庁が設置され、官園の施設は民間に払い下げとなって事業は縮小していった。しかし、明治、大正、昭和と、激動の時代を経ても、七飯の人々は、赤松の並木を大事に守り、そこには、いまも開拓者精神が息づき、農業への揺るぎない意志を引き継い

見事な赤松が建ち並ぶ七飯町大中山の「あかまつ公園」付近の国道５号（旧道）。函館側から七飯市街に向かう車線から撮影した。建設当時、札幌本道は函館－森間と室蘭－札幌間は陸路で、森－室蘭間は海路だった

でいる。

話は変わるが、赤松街道は最近、「ラーメン街道」ともいわれる。人気ラーメン店が点々と連なり味と個性を競い合っている。

また、ここの赤松は、冬の間、腹巻をしている。わらを巻き付ける「こもまき」で、害虫をわらに集めて越冬させ、翌春の４月から５月に、わらごと焼却するのだ。薬剤を使わない害虫駆除で、七飯の冬の風物詩になっている。

赤松街道で特に見応えがあるのは、七飯町鳴川の七飯マリア幼稚園から大中山の「あかまつ公園」の辺りまでの１・５キロメートルの区間だ。赤松公園の入口にある信号機のある交差点の側に、赤松街道の記念碑などがある。

また、この交差点から５００メートルほど七飯市街側に「男爵薯発祥地の記念碑」もある。

赤松街道は「ラーメン街道」とも言われる。個性的なラーメン店が、七飯町峠下から函館市桔梗まで点々と建ち並ぶ。人気店が多く、ラーメン激戦地だ。写真は、麺屋庄司の「濃厚エビだしらぁ麺」